

<この目で神の救いを見た> ルカの福音書 2章 22-35 節

クリスマスの出来事：「これさえあれば自分はもう何も思い残すことはない、
もう安心して世を去ることができる」

「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、

安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。」

この言葉は年齢に関わらず、このように語る事ができる所にこそ、本当に幸せな充実した人生がある。これで私たちは安らかに去ることができる。だからこそ、安らかに生きることができる。神への礼拝を通してキリストにお会いすることは、それほど大きな慰めと救いなのです。

シメオンは両親に連れられてエルサレムの神殿に来た幼子イエスに何を見たか。

①22-24 節。神殿に行った理由。・母マリヤの清めのため。・長男を神にささげるため。長男が神様のものとして聖別されるのは、長男だけが神さまの恵みを受けるためだけではなく、その後が続いて生まれてくる弟たちや妹たち、そしてその家族全体が、同じ神様の祝福の下に置かれるため。

長男であるイエス様が続く弟、妹とはイエス様を信じ従っていく私たちひとり一人。父なる神がイエス様という長男のもとに、そのような家族を集め、同じ恵み、祝福を与えようとしておられる。

②でもシメオンの目線の先には、さらに見えていたものがある。

それはこの幼子が十字架につけられるようになるということ。(34、35 節)

救いが実現するためには、多くの人々の心にある思いがあらわにされなければならない。主イエス様の十字架は人々の心の奥底にひそんでいるものを明らかにするもの。私たちの罪のために死なれた主は、罪の赦しのために死なれた主である。それがシメオンの見ていた救い。

シメオンはこの幼子を腕に抱いたとき、満足を得た。この満足は、シメオンが自分の仕事をなし終えたところにあるのではない。神様が、神ご自身の仕事を成し終えられたところにある。

